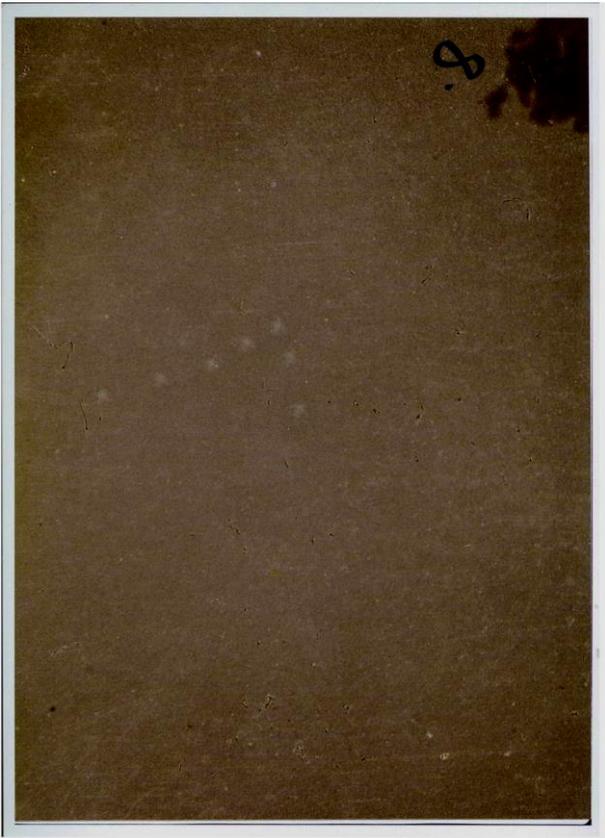


改訂履歷

初版	二〇一八年	八月十日
第二版	二〇一八年	八月一日
第三版	二〇一八年	八月二〇日
第四版	二〇一八年	九月五日
第五版	二〇一八年	十月八日
第六版	二〇一九年	一月三日
第七版	二〇一九年	二月二十三日
第八版	二〇一九年	三月十六日
第九版	二〇一九年	四月五日

レンズは語る

これは、終戦の年、昭和二十年二月十日、土曜日の午後
の記録である。五日〜六日の朝までに降った雪はほとんど消えた。
当日はカラッ風がいつもより強いが、天気は上々であった。
午後一時頃から空襲警戒警報が鳴り、二時二十五分には、「ブ
オーブオー」と空襲警報の断続音に変わった。



相場 一夫

自宅で農作業の用意をしていた父、相場定利（当時二十四
才）は、東の空に今まで見たこともないB29の編隊を見て、
思わず息をのむ。そして、これを写真におさめておこうとカ
メラを取りに家の中に飛び込んだ。すでにB29独特のエン
ジンの唸り音がウォーン、ウォーンと共鳴し、頭上を通過し
ている。急ぎ、庭に出ると同時にシャッターをきる。



これが、米軍第三編隊の七機である。

編隊と編隊の間隔は約四分で九編隊と推定される。『銀翼のアルチザン』（長島芳明 著 平成十七年 角川書店刊）

この書の中に三時を過ぎたところから爆撃が始まり、四十分後にB29は、去つたとある。（米軍の報告書には三十六分間とある）

三時五分より爆撃が始まり三時四十分まで続いたとみられる。

B29の編隊は太平洋上で二部隊、三一三爆撃団、七三爆撃団が合流し、一一八機と言われる。

これらは、筑波山上空より進路を西にとり、太田中島飛行機工場をめざして西進する。

いよいよ秋妻地区への墜落の序曲が始まっていた。日本側迎撃部隊の梅原三郎伍長機は筑波山上空に到達しようとしている。

七日、八日の米軍偵察機は上空10000mであったが、二月十日は強風（約100mの西風）のために高度は少しずつ低くなり茨城県下館町上空あたりでは八五〇〇mを切っていたと思われる。

搭載爆弾は、第七三爆撃団は六千ポンド。経験の少ない第三一三爆撃団は五千ポンド。機体重量が三十三トン。さすが

にアメリカ最新鋭のターボエンジンもあえいでいる、スピードが三五〇km前後であろうか。

梅原伍長機の繰り出す機銃弾はDEANER BOYの第四エンジンにあたった可能性がある。梅原三郎伍長（京都府綾部出身）は筑波山上空でB29の機銃により操縦不能になり、下館・大塚の山中に火だるまとなって墜落した。地元有志により、現在の下館カントリーゴルフ場内に、彼の慰霊碑がおかれ、毎月一日には線香がたむけられている。

一方、その頃すでに相模原飛行場を発進した倉井利三少尉機も館林上空へと向かっていたが、9000mに近い上空で、機銃は凍結により発射が可能だろうか……。零下三十度と酸素不足で頭の中は無音とスローモーションの世界へと飛び込んでしまう。

挺身隊より贈られた腰につけた人形が、彼の人柄を彷彿とさせる。三機撃墜の実績を持つ倉井少尉の顔は、今日も自信が漲っていたが、不幸にも何分か後には栃木県野木町に墜落することになる。

さらに吉澤平吉少佐は僚機伴了三少尉（別府出身）と共に、成増飛行場から発進。太田町上空との指示を受け、名機『四

式戦疾風』は全開のスピードで飛行する。部下の伴パイロットは、吉澤少佐の機に遅れをとっていた。ただ一機となった吉澤機はB29の第五編隊に接近し、機銃を放った。今まで後尾に付いていたB29は急上昇し吉澤機を的確に捉えていた。数発の弾丸は機体の尾翼部分にあたり一筋の黒煙を引くこととなる。

(大泉在住三澤盛雄氏の手記より) 戦闘機は煙をはきながらも懸命に追撃しB29の上方前方に達したと同時に反転し、巨大なB29に体当たりを試みたが鼻先をかすめるように落下していった。落ちていく途中に落下傘は開いたが、少佐の体は抜け落ち傘だけが血に染まって大泉高校の屋根に引っ掛かった。(東京、吉祥寺の大法寺に慰霊碑がある。吉澤少佐の姉が建立。)



倉井少尉



梅原伍長



吉沢少佐と血染めの航空帽

今は、訪れる人も少なくなったという。平成三十年五月二十四日、新井勲氏によって、彼の飛行帽が保存されているのが確認された

高野和男元大泉町長の日記には「大泉農業高校の屋根に吉澤少佐の血染めのパラシュートが引っ掛かり大泉警察署に届けられた」とある。高校の敷地内には翼の一部が落ちた(河上和吉元校長の記録)

B29の機体は夕日を反射して輝きを増していた。チカチカという表現がびったり当てはまるように、青空に散りばめられた機体の数がだんだん多くなり、はっきりと見えるようになってくる。第一編隊は十一機、第二編隊は九機、第三編隊は七機、第四編隊は十二機とも言われている。この第四編隊のうちの二機が墜落するが、第三編隊の七機が秋妻地区上空にさしかかったところ、相場定利によってカメラ(ベビーパール)のシャッターが切られた。

時間は午後三時二十分頃である。
昭和十二年製のカメラでは、高度八五〇〇m、全長三〇mの物体ではやっと飛行機であると判別できる位である。

第四編隊のDEANER BOY 機体番号224815

(以下、DBと表記する)がエンジンの不調を訴えていた。

このメッセージは前をいくSLCKS CHICKS 機体番号224784 (以下、SCと表記する)隊長機に伝えられていた。機はスピードを緩め、DBに近づいている。

この直後に事件は起こる・・・。

倉井利三少尉の機銃が火を噴いた。

第四編隊の中央を飛ぶ集団に弾は達したと思われる。その時のB29の機体番号は867だろうか。通称サツシーラッシーと呼ぶ。秋妻の慰霊祭に参加したナンシーサンプさんの父親が乗っていた可能性がある。(父親の名前はジェフさんである)

館林上空より白い煙を引きながら赤城山の上空で編隊に追いついたと言われている。倉井少尉はB29の前方、わずかな距離にいる。そして急降下攻撃である。(古河市大堤山中昇氏 手記)隊長機に向けてびったり照準を合わせ、トリガーに力が入った。

しかしB29の機銃は素早かった。ほんの一瞬である。倉井少尉の『疾風』は油圧系統を貫かれ、コントロールを失いそのまま直進する。操縦桿は無反応、『疾風』の右翼はB29

の尾翼の付け根に激突した。この激突で紫色の閃光が薄い霧につたわり、機体よりも大きく広がった。

『疾風』の右翼は大破し、下方に流されながら二回転し栃木県野木町佐川野の畑に墜落する。接触したB29はSCであるが、尾翼を折られて空気抵抗が大きく加わり跳ね上がるようにして、もぎ取られてしまう。

機体は真つすぐに下を向く、その瞬間に後続のDBが追突をする。SCは四つに分かれた。

コックピットは現在のバンドー化学と一本木の中ほどの一ツ橋一四一五番地、エンジンはDBと絡んで落下。主翼の部分は秋妻の田圃で、DBの西100m。尾翼は西風にあおられて落下角度を強め旭橋の東側に落ち、その中に立ったまま機銃に寄りかかり、死亡していた米兵は、髭を蓄えた、フランク・R・ケステナラ軍曹だった。

(米国公文書館所蔵 米軍報告書より二月十一日の報告。十五時二十五分、高度28000フィートで飛行中、秋妻へ二機が墜落したと、ロバート・カリッサー中尉の報告書にある。

機体番号:#42・24778 DRAGON LADY。同じく高度28500フィートで飛行中に二機が墜落し、目撃時間は十五時三十分とウィットネス・アリスワース中尉の報告書にもある。機体番号:#42・24802 BLACK



SLCKS CHICKS 溶解した機体の一部
ジュラルミン

CAT)
筑波山上空よりDBは第四エンジンから黒い煙を引き、S
Cに追突。プロペラは動いているもののコックピットは機能停
止してしまいが、エンジンは全開状態で、失速、前進、後退
を繰り返す。(太田市上江田 青木日出男氏証言)お互いを巻
き込みながら、木の葉が舞うように、ゆらりゆらりと落ちて
行く。

秋妻を過ぎようとした時に、二人の米兵が落下傘を伸ばし、
飛び降りた。秋妻の西方二〇〇mに脱出したものの高度が低

く、落下
傘は半開
きのまま
墜落死し
た。風に
あおられ
た落下傘
が大きく
はためく
光景は、
戦場さな
がらだ。

(現、秋妻在住白石悦男氏 証言) 焼死しなかったのは、こ
の三人だけである。

秋妻を過ぎた二つの機体は柿ノ木町九四七番地と砂田九五
九番地、一ツ橋一四一五番地へと吸い込まれていった。ほと
んど同時に地面に落下したが、DBのほうは態勢を立て直し
てすべるように着地し、機首を西から南へ向きをかえた。

前部のコックピットや主翼のあたりから出火したようであ
る。この九四七番地は、飯塚美知雄氏(現 秋妻在住)の父
の耕作地であったが不発弾の処理が行われ、昭和四十三年頃
まで爆弾池は存在していたと飯塚氏の証言をいただいた。

九五九番地は、岩崎和市氏の所有地で、耕作をするのに難
儀した。

部品類が散乱し、すべて回収するまでに五年以上もかかった
ようである。(写真のジュラルミンはその時のものである。筆
者の母の実家で私が祖父に頼み、ジュラルミンの残骸二個を
貰い現在まで一個保存していたが、大塚孝士氏(中野在住)
に譲った。小さいほうの一つは今も見つかっていない。

余談だが、母、相場ナミ(岩崎和市の末娘)は、秋妻橋を
北に100mの位置で、墜落するB29二機を目撃している。

又、長島頭、当時五歳（上尾市小泉在住）は県駅から母、晴江に手を引かれ、背中には妹の和枝をおぶって、父の実家である一本木の長島道太郎家に向かう途中に、黒煙を上げるB29と多くの人々を目撃している。

一方、二機が落ち始めた後、相場定利はカメラを胸の左ポケットに押し込み、妹の富美と妹のトシ（トシは平成三十年五月十四日に死亡したが、二十九年八月十二日に兄弟三人で現場に行つたと、新井勲氏と大塚孝士氏に証言）も空を見上げて、顔をお互いに見合わせ、三人で駆け出した。

フィルムを確認したら、残り四枚である。とりあえず北の方向へ走る。高島小学校を過ぎ、秋妻橋に到達した頃に、煙は西風に追われて、秋妻集落に届かんとしている。

すぐに墜落地点は判明した。

足利県道を左に折れて田んぼ道へと進んだ。

気持ちばかりが焦り、必要以上に近づくこともできない。周囲の人々の視線を避け、カメラを腹の下に隠し、作業衣のボタンの間からレンズだけを覗かせて、カメラのセットは距離が無限遠、絞りは開放、シャッターは100分の一秒である。

指を動かし渾身の一枚を墜落したB29にむけて、押す。二機の煙が秋妻に被さるように迫ってくる。煙と煙の間には金山の残雪が見える。

時折機銃弾の炸裂音が耳に入り、円形の煙がシャボン玉のように風に流されながらたちのぼる。

尾翼の後ろには、足利織姫山の後方の山々が、そして白根山が白く青空にくっきりと映える。さらに指先に力を入れると、心地よいシャッターの音が微かに聞こえた。



少しの時間茫然として煙の行方を見つめていたが、突然の大音響と共に、機体が四方八方に飛び散った。カメラを握る手が震えている。機体の一部分が尾翼の上方より自分の方へと向かってくる。これが九番の写真である。

横田進氏（昭和七年生 藤川在住）十三才の彼は麦畑に突入して軍服姿の遺体の近くで爆弾の爆発と機体の飛び散る光景を見ている。

次に、吸い寄せられるように尾翼に近づいた。幸いにも人影がほとんどないようなので北側にまわりこみ、

救命ボートと尾翼を撮る。

夕日が微かに水平尾翼に影を落としている。この影が、撮影時間を探し出す指針となり、証明につながった。

救命ボートは円形のラグビーボールのようだ。

またもやシャツターをきる。残り一枚、西にまわり全体像を、と思いながら場所の選定である。



煙が東に伸びている。手前には飛び散った機体が白い煙を吐き出している。

これが今日の最後の一枚である。写真左上の白壁の住宅は白石悦男氏の家である。

シャツター音を確かめて帰路につく。

妹二人も心なしか疲れが見え、帰るように促すと、大きく頷いた。

見渡すと、夕闇が迫っている。午後五時を過ぎた頃と思われる。





ちょうどこの頃、埼玉県熊谷市から中村正国防写真隊員が高島村役場に単車で到着した。既にあたりが薄暗くなり、写真撮影は無理であるとし宿泊所の手配を、相場市二（筆者の祖父）に依頼。当時、役場に宿舎はないため、応接室のソファで休み、市二も同泊することになる。彼の撮った写真は十二日の毎日新聞・朝日新聞・読売新聞の朝刊に載っていた。

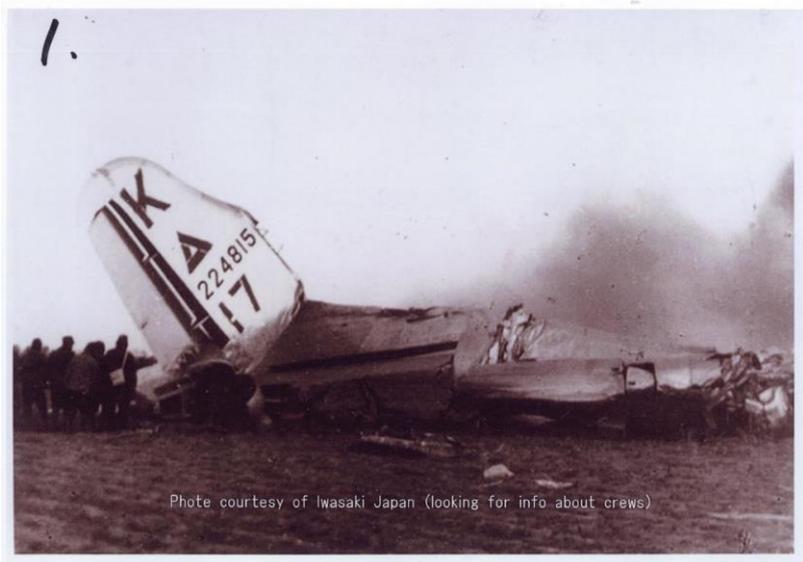
昭和 20 年 2 月 12 日 毎日新聞



高島村役場(昭和 22 年カスリン台風)

墜落より一夜明けて十一日、警防団よりの召集である。昨日のカメラにはフィルムが残っていないので探してみると、少し大きめのカメラ（ミノルタ、オートセミ）に残っていた。警防団のチョッキの胸に差し込んで朝からの警備である。朝八時からの秋妻田圃は今日も寒いが、山崎虎一郎警防団長と木村清作村長の指示により、昼夜交代の任務に入る。昨日、高島村に泊まっていた国防写真隊員の中村正隊員の姿も見え

二月十一日午前十時三十分頃になった。現場の煙は半分くら
いになったが、まだ燃え続けている。
折に触れて昨日のコースと同じ四枚の写真を撮ることがで
きたが、尾翼の北側では救命ボートはなくなり、後方銃士の
防弾ボックスが引き出されていた。





このフィルムは当時の社会情勢からすると、存在をゆるさ
れないものだろう。父は、後に焼却するとは思ってもいなか
ったはずだが、結果として昭和三十年頃フィルムを焼却する
ことになり私も手伝った。しかし、九枚の印画紙は残してお
いた。

これは悲劇の印影である。

この悲しい事実を記憶する人も少なくなってきた。

この場所で父は、あのカメラのシャッターを切った・・・。

私も、同じ場所に立ち、七十三年前のあの日のシャッター音
を聞くことができた。

この写真の記録が平和と平穏を誓う原点になることを切に願
う。

完

追記：本稿の作成にあたっては、米国公文書館の資料等は
郷土史研究家、新井勲氏より複写をいただきました。
その他、全般にわたり御指導を賜り深く感謝の意を表します。
また、秋妻地区の皆様には、多数の証言を頂き、厚く御礼申
し上げます。

編集協力者

邑楽町役場

半田 康幸

網倉 雄二郎

大泉町坂田

森 栄一

森 美津子

森 正史

千葉 潤子

邑楽町藤川

相場 君子

相場 道晃

相場 佳枝